

# 水問題の未来を変える生活者の力

野田 岳仁 *Written by Takehito Noda*

「孫が水を大切に、と云えば、私は必ず耳を貸します」

エジプトのアブザイド水資源灌漑大臣が洗車の際に、孫から「水がもったいない」と注意を受けたというエピソードでの言葉です。子どもや若者は潜在的に“伝える力”を持っていることを示しています。

冒頭の言葉は、50カ国から若者を集めた「ユース世界水フォーラム」(2003年、第3回世界水フォーラム、主会場は京都市)のオランダ皇太子や各国大臣ら政策決定者を招いたダイアログでのやりとりです。さらに私は、彼らに生活者として普段の暮らしで実践していることを尋ねました。しかし、誰からも明確な返答はありませんでした。世代や立場にかかわらず、すべての人に日々、生活があります。それでも、水問題解決につながる行動はなかなか実践できないのです。一方、私たちは、水筒を持ち歩く「マイボトルキャンペーン」を展開しました。水筒には京都の神社やお寺、お豆腐屋さんの湧き水を入れ、その文化的ストーリーをセットで持ち歩きました。ささやかなことですが、具体性と大衆性を軸に、楽しみの要素を加えた私たちの活動手法は多くの共感を集めました。生活者の視点から実践できることを共有し、提案していくことは大きな意味がありそうです。

私たちは、生活者として「水を生かす暮らし」、「水を生かす政策」を提言し続けています。「水を使うことは汚すこと」と認識し、できるだけ汚す水の量を減らすように心がけましょう。特に雨の日は都市部の

合流式下水道で未処理のままの汚水が川に流れ出すことがあり、洗濯などを避けることも現代生活の工夫です。節水を続けることは、水源の取水量を減らし、川の水量を増やし、生物が増えることにつながり、川で生きものを採る子どもたちの姿を生み出します。節水は川の魅力をつくり、愛着を生み出すことができるのです。そのために、節水を促すための料金体系をつくる社会的な仕組みも必要です。

食べものを残さず食べることも節水につながります。地域の水でつくられた食べものを選ぶ“地産地消”も大切です。家庭菜園の水やりに雨水を利用し、雨水でビオトープをつくれれば子どもの遊び場になります。

雨水利用は地域の災害用水源としても有効で、人が集えば、地域を強くする井戸端会議もはじまるでしょう。

水を利用することで水は汚れますが、愛着をもって上手く利用すれば水辺はきれいに生まれ変わっていきます。それは、やがて社会を、人の心を、潤してくれるはずです。

私たちは誰もが大きな力を持っています。想いを伝え、社会を変える力です。私たちが実践できることを毎日1人に伝え、聞いた人も同様に毎日1人に伝えていきます。これを続けると、たったの28日で日本中に伝えることができます。つまり、1ヶ月あれば社会を変えることができます。伝えることが得意な私たち、若い世代は、その中心的役割を担うことができそうです。

さあ、今日から一緒にはじめましょう。

あなたには、水の未来を変える力があるのです。



## Water Action!

生活者の水行動キャンペーンのロゴマーク

### 野田 岳仁(のだ・たけひと)

NPO法人Waterscape代表。1981年岐阜県関市生まれ。清流長良川の水で育ち水環境に関心を持つ。国内外の水辺を歩き現地の生活者の水の知恵を研究。国連や国際社会への公共財としての水憲章の政策提言活動、企業の社会貢献活動のサポート、子どもたちへのワークショップなどを展開。「ユース世界水フォーラム」で第6回日本水大賞国際貢献賞受賞。早稲田大学大学院公共経営研究科修了。